七月の俳句

歌碑巡る文学のみち梅雨湿り　　　　　　　鶴　子

こぼれ種に咲くとりどりの百日草

夏つばめ巣立ちて寂し日暮れ時

語り部に食ひ入る夏の大社基地　　　　　　文　子

掃射痕残る鉄橋梅雨の果

戦さ知らぬ我や八月十五日